https://rodosoken.com/

草島和幸前事務局長の死を悼む

熊谷　金道

労働総研前事務局長（在任期間2000年７月～2002年７月）の草島和幸さんが去る６月17日に動脈瘤破裂のため、東京都内北区の病院において亡くなられました。1932年８月20日の出生ですから享年75歳でした。謹んで哀悼の意を表すものです。

草島さんは、労働省会計課を皮切り（実際にはそれ以前にも定時制高校時代に民間企業にも在籍）に、東京都労働局などで公務員と組合役員を経験した後、国会議員秘書、統一労組懇事務局員、全労連事務局員・幹事など多彩な職歴・活動歴をもった人でした。

私が草島さんと一緒に仕事をするようになったのは、私が統一労組懇の専従役員になった1988年からでした。最初の印象は、豪胆というか豪放にして沈着、しかし、時にしばしば激しい論争を好みつつも、最終的には役員に花を持たせて持論を一時的に引くなど、さすがさまざまなキャリアをもった百戦錬磨の強者というのが私の強い印象でした。

草島さんは、日本共産党国会議員秘書、議員団事務局の政策小委メンバー、さらには党経済政策委員会委員としての経験などを持ち、統一労組懇事務局当時は政策問題の知恵袋として統一労組懇を社会的に押しだすのに大きな役割を果たしました。89年11月21日に全労連が結成され、統一労組懇が解散されて以降は全労連の事務局に採用され、結成直後の全労連で、誰もが初体験というナショナル・センターの土台づくりに大きな役割を果たしました。私も事務局長として結成当時から草島さんと一緒に全労連で仕事をしてきましたが、頻繁に求められる事務局長談話を作る際などに、筆が早く、幅広い分野に筆の立つ草島さんには個人的にも大いに助けられました。

草島さんの闘争エネルギーの源泉は、何よりも草島さんの生い立ち、それは幼児から母子家庭で貧困の中で育ち、太平洋戦争の悲惨さを体験、その後も朝鮮戦争を経験するなど貧困と戦争体験の中で成長し、それが原点で社会変革への思想形成と自分の生きる道を探求してきたことにあったと思います。そしてそれに磨きをかけたのが、東京都労働局、社労関係国会議員秘書としてのキャリアであったと思います。

草島さんが全労連時代に特に大きな力を発揮したのが、ナショナル・センターとしての視点での政策活動でした。全労連は結成直後から、大企業の内部留保問題や円高不況への対応など時々の情勢に攻勢的な問題提起を社会的におこなってきましたが、その中心的役割を担ったのが草島さんでした。とりわけ彼が得意としていた政策分野が雇用・社会保障で全労連の方針・政策のみならず、対外的な執筆活動でもその業績は『労働運動』誌や『学習の友』などに数多く残されています。また、96年８月には新日本出版社から出版された「シリーズ労働運動」第９巻の「社会保障と労働者の暮らし・権利は」を執筆しています。大月書店から02年８月に出版された相沢與一編、労働総研監修の『社会保障構造改革－今こそ生存権保障を』では「雇用・失業問題と政府の雇用政策」を執筆しています。

仕事を離れた時の草島さんの趣味は相当な腕を持っていた囲碁と山登りでした。登山では一人歩きが好きだったようで飯豊連峰に出かけて台風に遭遇、ひどい目にあった話などを聞いたこともありました。また、時間内活動と時間外活動の接点になっていたのがお酒だったと思います。統一労組懇当時も全労連に来てからも、草島さんは机の下にウイスキーのボトルをキープしていて、勤務時間が終わるとそれをおもむろに取り出し、美味しそうにちびりちびりとやりながら原稿を書いていたことを今も忘れることができません。

（くまがい　かねみち・代表理事）